平成三十年度入学試験問題

国　語

注　意

一　問題冊子は一冊（14ページ）、解答用紙は二枚、下書き用紙は一枚です。

二　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。

三　すべての解答用紙に、それぞれ二箇所、受験番号を算用数字で記入しなさい。

四　解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。

五　試験終了後、問題冊子と下書き用紙は必ず持ち帰りなさい。

問題　一

次の文章は、生物の進化や自然淘汰（とうた）は生物のもつ形質をより効率的で経済的な方向へと洗練させてきた結果である、ということが書かれた後に続くものである。これを読んで後の問に答えなさい。

さて今度は、(1)経済性を度外視した、すなわち「非常識」に見える例を見ていきましょう。

進化は派手で無駄に満ちた生物も創り出してきました。派手な生物の定番としてはクジャクが挙げられます。ダーウィンが考察して以来、クジャクは生物の求愛行動を研究する者にとってシンボリックな存在となっています。

本来、鳥の羽は効率よく飛び回るために機能しているはずです。季節の変わり目に何千キロメートルも飛ぶ渡り鳥と、花の蜜を吸うためにホバリングするハチドリとでは、羽に求められる性能は違うでしょうが、いずれにせよ飛ぶことを目的に羽を使っているのには違いありません。ところが、クジャクのオスのあまりにも長い羽は、飛ぶのにかえってジャマ（ア）になっています。また、メタリックに輝く目玉模様は、むしろ捕食者にネラ（イ）われるリスクが高まってしまいそうです。

ご存じの通り、こうした派手さは繁殖のために進化した形質です。求愛の際、オスのクジャクは羽をふるわせてメスにアピールし、メスはじっくりと観察して交尾相手にふさわしいオスを選んでいます。異性の気を引く派手で目立つ形や行動は、効率よくエサをとり、効率よく成長するという観点から見ると、はなはだ非経済的ですが、一方で、動物は成長するだけでなく、成熟したらパートナーと交尾をして子孫を残さなければなりません。だからこそ、成長のためには無駄なことに見えても、繁殖に必要な形質にも惜しみない投資をするのです。オスと違って、異性にアピールする必要のないメスが地味な見た目をしているのは、派手な姿が無駄であることの証拠にほかなりません。

クジャクの羽、グッピーの尾びれ、ライオンのたてがみ――オスだけに現れる派手さは、無駄のない洗練された行動と同じくらい、いや、むしろそれ以上に自然愛好家の関心を集めるものです。もちろん、進化生態学者にとっても格好の研究対象です。

ここでは、なぜオスは繁殖のためにそもそも派手になるのか、立ち止まって考えてみましょう。この問いは、「そもそも、メスはどうして派手なオスを好むのか」と言い換えることもできます。オスとメスのコミュニケーションにおいて、もっと効率的なアピールの手段はなかったのでしょうか。

メスの立場からすると、生存力の高いオスと交尾できれば繁殖戦略として成功だといえるでしょう。生存力が高いオスとは、たとえばクジャクの場合、ヒョウをはじめとした天敵からうまく逃れることができるほど高い運動能力をもち、エサとなる果実や小動物をたくさん捕まえ、その栄養を効率よく吸収して順調に成長できる丈夫な個体のことを指します。健康で力強いオスの形質が繁殖を通じて後世へと引き継がれるのなら、メスは自分の子の将来についてよい期待を持てるのです。

生存力の高いオスと交尾したいのであれば、なぜメスは体の大きさや運動能力といった生存力を反映する形質でオスの価値を評価しないのでしょうか。オスにしたって、なぜ生存力そのものをアピールしないのでしょうか。あえて無駄に満ちたアピール手段に頼る必然性はどこにあるのでしょうか。生き物たちの派手な模様は私たちに楽しみを与えてくれますが、自然界の原則である効率性という観点からすると、はなはだ不思議な現象なのです。なぜ生きる力とは無関係なところでモテ／非モテが決まるのかという問いが、注アモツ・ザハヴィの「ハンディキャップ理論」以前には謎として残っていました。

アモツ・ザハヴィの提唱したアイデアは、無駄こそ信頼の証になる、というものです。

あらゆるコミュニケーションでは、情報を発信する側から受け取る側に何らかのメッセージが伝わります。求愛のときなら、オスは「私はあなたの交尾相手にふさわしく魅力的ですよ」というメッセージをメスに伝えたいはずです。そのメッセージを運んでくれるのが、見た目や鳴き声をはじめとした何らかのシグナル（信号）です。送り手であるオスはメスにこうしたシグナルでアピールして、自分のメッセージを伝えようとしているのです。そして受け手であるメスは、シグナルをもとにしてオスの真意が何であるかを読み解きます。

ザハヴィが考えたのは、「メッセージを正しくやりとりするにはどのようなシグナルが適しているのか」という問題です。メスはオスから発信されたシグナルをもとにして、オスの真価を査定しなくてはなりません。そのためには、シグナルが真実のメ

ッセージを伝えている必要があるのです。ところが、どうしても交尾をしてたくさんの子を残したいオスにしてみれば、手段を選んでいる場合ではないかもしれません。実はそれほど生存力が高くないにもかかわらず、オスはシグナルだけは派手にして格好をつけようとするかもしれません。つまり、求愛のやりとりで相手をだましてまで自分の利益を得ようとする戦略、すなわちニセのシグナルが侵入する余地があります。

ここで重要なのは、あくまでもコミュニケーションが双方向であることです。つまり、(2)オスの目線でばかり考えてはダメなのです。ニセのシグナルは、オスにとって得であっても、メスにとっては信頼に足るものではなく、不都合でしかありません。まんまとだまされて魅力的でないオスと交尾してしまっては、メスにとって得にならないからです。このような状況のとき、メスはどうすればよいでしょうか。メスは偽りが侵入しやすそうな種類のシグナルを無視すればいいだけです。シグナルの受け手であるメスにはこうした対抗手段があります。もし、「そのシグナルを発信しているからといってたくましいオスとは限らない」とメスが気づいてしまったら、次の対応としてオスはどうすべきでしょうか。メスに見向きもされずもはやその価値を失ってしまったシグナルではなく、メスの信用を勝ち取るために「自分は生存力が高くて魅力的なオスですよ」というメッセージを正しく伝えるシグナルを採用しなければなりません。

では、自分が魅力的であるというメッセージを正しく伝えるシグナルとは何なのでしょうか。それは、本当に魅力的なオスでないと発信できないようなシグナルです。逆に言うと、実は魅力的でないオスには発信しにくいシグナルです。良いコミュニケーションのためには嘘(うそ)をハイジョして、真実だけをやりとりしたいわけですから、「魅力に応じてシグナルの度合いを変えるべし」という原則は直感にも反しないかと思います。

さて、求愛の際にシグナルとして機能しているのは、オスの派手さに他なりません。それでは、本当に魅力的なオスでないと派手になれないのでしょうか。そもそも生存力の高いオスとは、天敵による攻撃から逃れ、エサを効率よく摂取し、うまく成長につなげることのできる個体です。そして重要なことに、このように十分に成長できるオスは、その余力をもとにして、派手な羽や模様を作り上げるためにわざわざ投資することができます。無駄なコストをかけてもなお、十分な栄養をもとにして暮らし

ていけるからです。

逆に、実は魅力的でないオスとは、エネルギーを十分に蓄えることのできない個体です。そのようなオスは、派手で無駄な形質に大きな投資をできません。もし見栄をはって派手にしようものなら、自分の生存を引き換えにするしかありません。それは本末転倒というものです。生きることさえままなりません。ですから、魅力のないオスは無理のない範囲で身の丈に合ったシグナルを作り出すことになります。その結果、とても派手な魅力的なオスから、あまり派手でない魅力的でないオスにかけてばらつきができます。そうすれば、メスは派手さという形質をオスの価値を正しく伝えるシグナルとして信頼できるのです。

ザハヴィの仮説で重要なポイントは、メッセージを正しく伝えるシグナルにはコストがかかっているということです。ここでいうコストとは、成長や生存のために何らかの犠牲を払っているという意味です。つまり、メスにモテるからといって、すべてのオスが派手な姿になれるわけではなく、他のオスよりうまく成長する能力のあるオスだけが、派手に着飾る余裕をもてるのであり、だからこそメスは安心して派手なオスを選べるというわけです。もしコストがかからないシグナルなら、誰もが発信できてしまいます。そのような安価なシグナルは信頼に欠けるため、コミュニケーションでは採用されません。(3) 実用的な側面では無駄にあふれたシグナルだからこそ、信頼が担保されているのです。

こうした実力に応じた差をモウ(エ)けている仕組みがスポーツにおけるハンデに似ていることから、ザハヴィの仮説はハンディキャップ理論と呼ばれるようになりました。また、ここで使われるシグナルは嘘いつわりのないメッセージを伝えることから、正直シグナルと呼ばれています。

無駄を切り詰める倹約家の生物像と、派手なシグナルにコストを投資する浪費家の生物像は、一見すると矛盾するものです。しかしどちらのプロセスも、自然淘汰を通じて個体が増殖していくのにコウケン(オ)しているという点では共通しています。

（鈴木紀之『すごい進化』による）

注　アモツ・ザハヴィ＝イスラエルの進化生物学者。

問一　傍線部**アイウエオ**のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

問二　波線部について、本文における「本末転倒」とはどういうことか、「本末」の内容が分かるように具体的に説明しなさい。

問三　傍線部(1)について、ここでいう「非常識」とはどういうことか、生物における「経済性」を具体的にした上で、説明しなさい。

問四　傍線部(2)について、「オスの目線でばかり考えてはダメなのです」とあるが、メスの目線で考えると、メスの戦略はどうなるか、メスの立場を明らかにしながら説明しなさい。

問五　傍線部(3)はどういうことか、分かりやすく説明しなさい。

問題　二

次の文章は、「ゲバチの花」の後半である。三年ぶりの帰省から勤務先の土地へ戻る途中、「彼」は一日の空き時間を持て余し、とある港町の駅に降り立った。そこで「彼」は見知らぬ老夫婦から「ススム」と呼びかけられ、強引に自宅へ連れて行かれて、夫婦の息子である「ススム」として一泊することになった。以下の文章を読んで、後の問に答えなさい。

――夜半だった。ふと目ざめて、しばらくは彼は自分がいまどこにいるのかが思い出せなかった。

両隣で、鼾（いびき）が聞こえている。その片方が、ひどく大きい。奇妙に酸いような、古びた家の匂いがする。……しだいに、彼は思い出した。高いほうの鼾は老婆だった。彼は「ススム」として、粗末なその老夫婦の家で、[A]の字になって寝ているのだ。

なにか、両側に起伏する二人の規則的な鼾が、彼を、ひどくやすらかな、のびのびとした、(1)ある安定した感覚に誘っていた。狂った老夫婦とはいえ、彼への心づかいや愛情は、すべて心からの、せいいっぱいのものに違いなかった。彼は、自分が和やかにそれに包まれているのを感じていた。両側の、さも気楽そうな鼾が、さらにその感覚を深めている。……

そして彼は、奇妙に冴（さ）えた意識で、昨日までの休暇をすごした東京の生家をおもった。――大学を出て、彼が東北の一都市に就職をしてから、兄夫婦がその家に入っていた。久しぶりに、家族の一員として迎えられるのを予期して帰京した彼は、自分が、すでにその生家での成員の一人ではないのを、いやでも知らねばならなかった。家族たちの冗談や流行語も、彼だけには通じず、一人ののけものでしかないのだった。彼なしでの何年間かが、すでにそこではひとつの歴史となり、彼にはわからない習慣をつくっている。かつて、家の主は父だったが、その父が停年退職をしたいまでは、主は兄であり、さらにその兄を通し、一家を支配しているのは嫂（あによめ）でしかないのだ。……彼にあたえられていた四畳半は取りこわされ、庭は一面に芝生となり、白いペンキの塗られた子供用のブランコが置かれていた。彼がよくその木影（こかげ）で本を読んだ楠（くすのき）も、日当りを悪くするという理由から伐（き）り倒され、そこには安っぽいパーゴラ[注]が、枯れた蔓薔薇（つるばら）をからませているのだった。

家父長の地位を降りた父、そして母は、嫂の機嫌に[B]して暮していて、うかつに孫を可愛がることもできず、二人とも

急に老けこんだのが目に見えてわかった。そして彼は、その新しい家族構成のなかでは、完全によそものであり、せいぜい一人の「客」として寝泊りを許されているのにすぎなかった。

彼が甘かったのかもしれない。しかし、そこで自分が育ち、巣だと思いこんでいた同じ家が、ただの他人の家でしかない感覚は、やはり耐えられなかった。自分から休暇がまだ一日あまっているのに、(2)東京の家を発たざるを得ない気持ちに追いこまれた。……

どこからか、一筋の朝の光が流れている。そこに舞う昨日まで未知だった家の埃をみつめながら、結局、おれの欲しかったのは、この感覚、家族の一員として迎えられ、欠けていた穴をふたたび埋めるように、自分がその成員の一人である「家族」というもののなかに戻ることの安定だった、と彼は思った。……なつかしいそこでのひとかたまりの連帯のなかに帰る意識。自分専用の場所に、こうして背中をつけて睡るこの感覚こそ、彼は、三年ぶりで休暇に生家へ帰ることの意味だったし、目的だったのだと思った。が、皮肉なことに、それは東京のあの生家にはなく、おれにはこの未知の土地の、子供を失くした狂った老夫婦の、ぶわぶわに膨れた畳の上にしかなかったのだ。……

「……ススム。……ススム。……起きているのかい?」と、老婆の低い声が聞こえた。彼は、わざと返事をせず、目をつぶった。

「ダメだよ、酔っぱらって暑いからって、蒲団を蹴とばしちゃ……、寝冷えするよ」

闇のなかに老婆の荒れた手がのびる気配がして、黴くさい彼の掛蒲団を直すと、二、三度、かるくその裾をたたいた。無言で、彼はさらにかたく目をつぶった。

冬の空が、一面にみずみずしく光っていた。彼が、その老夫婦の家を出たのは午後になってからだったが、青空はまだ眩しかった。

老夫婦は、「ススム」の遠洋漁業への出発になれていたのか、意外なほどあっさりとした態度で、引き留めなかった。

「こんどこそ、たくさん金を儲けて帰ってくるだぞ」

と、不思議なほど明るく老爺はいった。

「……ああ、お小遣いだ」と、思いついたように彼はいって、用意した紙幣の紙包みを出した。「ほんの、少しなんだけどね」

「ばか。所帯をもったときの用意だ。貯めとけ」

「でも……」

「いいんだってば」と、老婆も目を赤く腫らした顔でいった。「それより、こんどこそ忘れるんでねえぞ。ここに、父ちゃんと母ちゃんとが、いつでもお前を待ってるってこと」

「船が着いても、港の娘のところなんかに入りびたっているんでねえぞ。いつかみたいになあ」

と、老爺はいい、陽気な笑い声をあげた。

彼は、なにもいう言葉がなかった。それをかくすように、門口の夾竹桃に似た木を見上げた。意味もなく、彼はいった。

「これ、夾竹桃かな。古い木だね」

「なにをいうだ、こりゃゲバチだ」と、すると老爺が口をとがらせて答えた。「ほら、夏にはお前、紫の大きな花をつけてよ。……お前、この花は大好きだ、っていつもいっていたでねえか。忘れ屋だな、ほんとに」

——突然、彼はふいにその木が緑の葉を生い茂らせ、その濃い緑の重なりのなかに点々と紫色の花をつけた、このゲバチの木の夏が目に見えるような気がした。……東京の家の楠は、蔓薔薇のパーゴラにさえぎられて、どうしても昔のその木を目に浮かべることができなかったが、(3)何故かこのゲバチの木は、一瞬のうちにまだ見たこともない葉を群がらせ、大きな紫の美しい花をつけて、彼の目に浮かんできたのだった。

「そうだ、今度は、このゲバチの花の咲くころに帰ってくるだぞ」

と、老婆が声をふるわせながらいった。

二人に見送られて、彼はスーツ・ケースを片手に、駅のほうに歩きだした。

昨日、はじめて来たその町の、海岸に沿ってまばらに家がつづく道を歩きながら、彼は、おそらく自分が二度とこの町を、狂

ったこの老夫婦を、訪れることがないのがわかっていた。――また、この老夫婦が、ただその男が未知の若い男だという理由だけで、新しくあの町を訪れた男に、「ススム」を見、たぶん、あらゆる努力をかたむけて泊めようとするだろうこともわかっていた。

……片側だけに線路の走っているホームに立ち、なかなかやってこない単線の列車を待つ間に、彼は、ふいに自分のなかで、なにかが完全に終っているのに気づいた。終ったのは、ひとつの夜、ひとつの旅だったかもしれない、いや、終ったと感じたのは、突飛な夢のような、昨日からの不思議な時間の連続だけではなく、こんどの休暇そのものかもしれない、と彼は思った。

列車に乗ると、ふいに海からの波音が跡絶えた。窓からの昨日と同じように白く輝く冬の海を眺めながら、彼はその間の経験は、ひとつの奉仕でも、また、いわゆる愛のドラマとかいうものでもないのだ、という気がした。おそらく、自分を過ぎて行ったものは、ある一日、といったようなもので、それ以上でも、以下のものでもないのだ。

――列車は、汽笛の音を引きずってトンネルの轟音と闇のなかに入った。その闇の向うに、彼を待つ放送局での日常がはじまるのを感じながら、せめてこのトンネルの間だけでもと思い、彼は黒い窓をみつめて、あのゲバチの木の緑と、その葉の群のなかに点々と散った美しい紫の花を、もう一度、必死に、あざやかに目にうかべた。

（山川方夫『ゲバチの花』より）

注　パーゴラ＝軒先や庭に作られる日陰棚で、木材などに蔓性の植物を絡ませたもの。

問一　空欄Aを補うのに適当な漢字一字を、空欄Bを補うのに適当な擬態語を答えなさい。

問二　傍線部(1)「ある安定した感覚」とは何か、分かりやすく述べなさい。

問三　傍線部(2)「東京の家を発たざるを得ない気持ち」になったのはなぜか、彼の帰省体験をふまえて、理由を述べなさい。

問四　波線部（二箇所）の老婆の言葉は、彼にどのような思いを伝えているか、作品世界における役割にふれつつ分かりやすく

述べなさい。

問五　傍線部(3)について、まだ見たこともないゲバチの葉と花が彼の目に浮かんできたことは何を意味しているか、分かりやすく述べなさい。

問題　三

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ある姫君、殿のもとへおはすべきにてありけるを、[注一]乳母教へけるは、「やさしく尋常なることをば、物の姫君などのやうにとこそ申せ、何となき事のみ、御口がましき御癖のおはします事の、然るべからず覚え候ふに、殿の聞かせたまはむ時、(1)いたく物な仰せられ候ひそ。『あはれ、この御前の、物を仰せられよかし。聞かむ』など思し召す時、物は仰せ候へよ。春の鶯の、籬の竹におとづれむを聞かむやうに、めづらしき御事にて候へよ」と教へ申しければ、「我は[注二]ままよりさきに心得たるぞ、何しにさかしく教ふる」とのたまへば、「御心得だに候はば、それこそ心安く思ひまゐらせ候へ」とぞ言ひける。

さて、殿のもとへおはして後、二、三日は(2)つやつや物ものたまはず。これもあまりなりと思ひけるほどに、殿と並びて物召しけるに、よによき[注三]酸茎のありけるを、なほ欲しく思はれけるにや、膝を立て、[注四]肩をすべ、羽づくろひするやうにして、頸を延べ、声を作りて、「酸茎食はむ」と二声、鶯の鳴く声色にてのたまひける。乳母、あまりに心憂く、あさましく覚えて、また言はせじとて、(3)「やがてまゐらせむ」と言ひけるが、遅かりければ、「きときときと」とぞ言ひける。まことに興醒めて、殿も思はれける。

物の心を得ずして言葉にしたがふこと、世間出世かくこそありけれ。[注五]

（『沙石集』による）

注一　おはすべきにて＝輿入れなさるはずで。

注二　まま＝乳母。

注三　酸茎＝食べ物の名前。今の漬物の「すぐき」。

注四　肩をすべ＝肩をすぼめて。

注五　世間出世＝俗世間においても、仏門においても。

問一　傍線部(1)(2)(3)を現代語訳しなさい。

問二　波線部**アイウエ**は、それぞれ誰の動作か、本文中の言葉で答えなさい。

問三　二重傍線部**Ⅰ**の中の「きと」は「早く。急いで」の意であるが、「きときときと」と言い連ねることによって、もう一つ別のものを意味するようになっている。「きときときと」という言い回しが意図する、「早く早く早く」以外のもう一つの意味合いを答えなさい。

問四　二重傍線部**Ⅱ**について、「殿」はなぜそのように思ったのか、説明しなさい。

問五　二重傍線部**Ⅲ**に「物の心を得ずして言葉にしたがふこと」とあるが、これはどのようなことを意味しているか、本文全体の内容をふまえて説明しなさい。

問題　四

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（出題の都合上、送り仮名を省略した所がある。）

蔣堂侍郎為[注一]淮南転運使一日、属県例致賀冬至書上皆投書即還、有一県令使人、独不肯去、須責回書[注二]。左右諭之、皆不聴、以至呵逐[注四]亦不去、曰、「寧得罪、(1)不得書不敢回邑」。時蘇子美[注五]在坐、頗駭怪曰、「阜隷[注六]如此野狼[注七]、其令可知」。蔣曰、「不然。令必健者、(2)能使人不敢慢其命令如此」。乃為一簡答之、

A方去。子美帰呉中月余、得蔣書。曰、「県令果健者」。遂為之延

B誉、後卒為名臣。或云、乃天章閣待制杜杞也。[注十]

（沈括『夢渓筆談』による）

注一　蔣堂侍郎＝蔣堂（九八〇～一〇五四）は北宋の政治家、文人。最終官位は礼部侍郎であった。

注二　淮南転運使＝転運使は宋代の地方最高行政区である路の長官。淮南路は現在の江蘇省・安徽（あんき）省の長江（揚子江）北岸地域、及び河南省の一部。路の下に県が属す（「属県」）。なお、県の長官を県令と言い、また邑令とも称す。

注三　回書＝返事の手紙。ここでは冬至を祝う賀状に対する返事のこと。

注四　呵逐＝大きく口を開けて叱りつけ、追い出そうとする。

注五　蘇子美＝蘇舜欽（一〇〇八～一〇四八）、字は子美。「呉中」（現在の江蘇省蘇州市）に寓（ぐう）居した。

注六　皁隷＝県の下級官吏。

注七　野狠＝強情で礼儀知らず。

注八　健＝賢い。有能な。

注九　延誉＝人を褒めそやして、その名声を広めること。

注十　天章閣待制杜杞＝杜杞（一〇〇五～一〇五〇）は、宮廷図書館のひとつである天章閣の侍従として、他官を兼任しながら、天子の顧問を務めた。

問一　傍線部Aは誰の行動か、傍線部Bは誰のことか、本文中の呼称を用いて答えなさい。

問二　傍線部(1)をすべて平仮名で書き下し文にしなさい。現代仮名遣いを用いてもかまわない。なお、ここでの「回」は帰る意である。

問三　傍線部(2)を現代語訳しなさい。

問四　蘇子美と蔣堂とは、はじめ県令に対して異なる評価をしていたが、その根拠となった「使人」の言動を要約しながら、両者の評価がどのように違うのかを、分かりやすく述べなさい。